

小学校高学年以降の道徳授業用教材と授業スタイルの開発研究 ——討議による道徳性の発達支援——

鈴木由美子 宮里 智恵 中尾 香子 江玉 睦美

問題の所在

本研究は子どもの道徳的判断力を高める道徳授業用教材の開発と授業スキルの開発をめざす研究の一部である。文科省の調査結果(1998.6)にあるように、道徳授業は学年が上がるにしたがって子どもからの評価が下がる傾向がある¹⁾。とくに高学年以降において評価が下がることが問題となっている。この要因のひとつとして子どもの発達段階に即した教材と授業スタイルの開発が不十分なことがあげられる。そこで本研究は、子どもの道徳的判断力の向上を支援する一方法として、討議による道徳授業を提案し、その有効性を検証することにする。高学年以降の子どもが対象であることから、道徳的価値葛藤を含む教材を用いた授業を提案する。

道徳的価値葛藤を含む教材を用いた道徳授業として、現在注目されているのは、コールバーグ理論に基づいたモラル・ジレンマ授業である²⁾。この授業研究において子どもたちは教材に集中し、熱心に討議を行っている。本研究においても多大な示唆を受けた。鈴木の研究グループにおいても、2003年から道徳的価値葛藤を含む教材を開発し、道徳授業を行ってその有効性を検証してきた³⁾。昨年は、「総合単元的道徳授業」の試みとして、体育科での共有体験を教材化した道徳授業を提案し、低学年での有効性を示唆することができた⁴⁾。

本研究では、高学年、中学生を対象とした教材の開発を主眼とし、道徳授業に対する評価を高める視点として「楽しさ感」と「有用感」とをとりあげ、楽しくかつ有用であるとともに、道徳性の向上を促す道徳授業用教材の開発をめざすことにする。

研究対象は、広島大学附属三原小学校5年生であり、研究方法としては、1点固定式とフリーカメラ各1台による道徳授業のビデオ録画とその分析である⁵⁾。昨年度開発した道徳性発達指標により子どもの発言、意見、感想等を分析する⁶⁾。道徳性発達という側面と、

授業の「楽しさ感」・「有用感」という側面から分析を行い、楽しくかつ有用で、道徳性の発達支援に有効な教材の要素について検討する。

本研究においては、事前研究授業として昨年度開発した「貫戸さんの葛藤」という教材を用いて討議による道徳授業を行い、子どもたちの道徳性を高める要素について検討する。その際、「楽しさ」だけでなく「有用感」という側面からも検討する。事前研究授業の結果をふまえて新たに教材を開発し、高学年以降の子どもに有効な道徳授業の要素について検討する。

1. 価値葛藤を含む教材を用いた道徳授業の検討

—「貫戸さんの葛藤」から—

(1) 授業の概要

日時：2004(平成16)年7月2日(金)

対象：附属三原小学校5年10学級

授業者：宮里智恵

授業のねらい：国境なき医師団で活躍している貫戸朋子さんは、難民キャンプで残り1本しかない酸素ボンベの使い方にかかわって目の前の患者の命と長い行列で待っている患者の命双方の重みに悩んだ。助からない目の前の子どもに酸素を与え続けるべきか。酸素を切って長く待っている他の患者に回すべきか……。現実起こったこのことを考えさせていく中で、子どもたちに命の重さを感じ考えさせることをねらいとする。

資料：

資料1 「貫戸朋子さんの葛藤」⁷⁾

1993年、今から10年前、貫戸朋子さんは内戦にあえぐスリランカの難民キャンプを訪れ、国境なき医師団の一員として医療活動を行っていました。その時に起こった実際の話です。

国境なき医師団がキャンプをはっている場所には、診察・治療を受けようとする人々が長い列をつくって待っています。貫戸さんが診察をしているとき、緊急の患者がやってきました。その患者は、お母さんに連れられた5歳の子供で、顔色が悪く、ものすごく苦しそうな息をしていて、目も白目をむいていました。

貫戸さんはこれまで何人もの患者を診てきています。貫戸さんは、この子どもにどのような処置をしても、もう助からないことを確信しました。その時手伝っていた看護師が酸素マスクをその子にあげても、顔色はよくなりず、少しも楽になっていません。

貫戸さんは酸素を切ろうかどうか迷いました。なぜならその時、酸素ボンベはその1本しか残っていなかったのです。この1本が最後で、このキャンプ地に、次にいつ酸素ボンベがやってくるかわかりません。もしかしたらこの後、酸素ボンベを必要とする人が来て、その人がこの酸素ボンベによって助かるかもしれません。例えば生まれたばかりの赤ちゃんは、ちょっと酸素をあげると泣き出して元気になることがたくさんあるのです。その時に備えて、貫戸さんは酸素をとっておきたいと考えたのです。

しかし、一緒に働いていた看護師が、酸素を切ってはダメというジェスチャーをしていました。貫戸さんは酸素を切ろう切ろうと思いつつも、すぐには切るのをやめて少しの間考えました。・・・結局貫戸さんはその子の酸素を切りました。(作：今永泰生)

資料2 「貫戸朋子さんの葛藤—その後—」⁸⁾

私は、子どもの酸素ボンベを切る決断をしました。この決断が間違っていたとは思いません。でもこのときの胸の痛みは、決して消し去ることができないものです。

このように難民キャンプ地では、過酷な現実があります。不十分な設備や医薬品の下での医療活動は、心残りなことばかりです。それなのに、毎日がとても新鮮な感動で満ちています。ぎりぎりの状況の中で生き

抜こうとする、キャンプで出会った人々の明るさに勇気づけられ、子どもたちの屈託なさや素直さに心洗われ、温かいまなざしに感謝し、悲しみの表情に涙しました。なんでもない、ささいなことに感動したり、喜んだりできる人間のすばらしさを味わうこともできました。

1994年4月、貫戸さんは定められた6ヶ月の任務を終えてこの地をあとにします。そして、次の任地、戦火の激しいボスニアへと赴くことになります。

(作：今永泰生)

(2) 授業過程

【導入】

日頃、わたしたちは病気やけがのときは病院に行き、医師の診断と薬などによって元気を取り戻していることを確認する。

【展開】

[資料提示]

- ① キャンプ地・治療を待つ人の行列・少ない医薬品の写真を示す。
- ② 話を読み語る。貫戸医師・看護師・病気の子どもとその母親の写真を示す。

[第1次判断]

ワークシートに自分の考えで判断とその理由を書く。

[班内討議]

納得できる理由とともに、意見をひとつにまとめる。

[全体討議]

一つの班の考え方に対して意見を交流する。

[最終判断]

ワークシートに自分の考えで判断とその理由を書く。

【終末】

「その後」のことを聞き、貫戸さんの思いを知るとともに今日の学習の感想を書く。

(3) 道徳性発達指標と第1次判断、最終判断の結果⁹⁾

道徳性発達指標

	酸素を切るべきだった	酸素を切るべきではなかった
前 慣 習 的 水 準	第1段階 罰回避と従順志向（罰の回避と権威に服従すること） 行為の意味や価値とは無関係に、罰を避けたり、権威に対して盲目的に服従したりすることを正しい行為であると考 える。 (他律的判断中心)	
	<ul style="list-style-type: none"> ・酸素を送ってこない人たちが悪いから。 ・助からないからしょうがない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師が酸素を切つてはいけないと合図したから。 ・もしかしたら助かるかもしれない。 ・見殺しにしたら罪に問われるから。

慣習的水準	第2段階 道具的互惠主義志向（利己的，自分本位に判断すること） 行為における損得が判断基準となり，自分や他者の欲求を満たすことが正しい行為であると考え。人間関係は取引の場のようにみられる。 （自意識と社会性の芽生え）	・ たくさんの人を助けると報酬をもらえるから。 ・ 助からない命を治療すべきでないから。（2-A）	・ 酸素を切ると目の前の患者を殺したことになり，後悔しなければいけなくなるから。（2-A）
	（社会的な心情や判断の芽生え） ・ 長く苦しむより早く酸素を切って薬にさせたいから。 ・ 他の大勢の患者が喜んでくれるから。（2-B）	（社会的な心情や判断の芽生え） ・ 目の前の苦しんでいる子どもを何とかして助けたいから。 ・ 最後まで最善を尽くすことで，たとえ助からなくても，その母親が喜んでくれるから。（2-B）	
	第3段階 他者への同調，あるいは「よい子」志向（よい子として振る舞うこと） 他人からの肯定的な評価が価値基準となり，他人を喜ばせたり，助けたりすることが正しい行為である。多数意見への同調がみられる。 （他者意識と周囲への配慮）	・ 助けられない命よりも，助けられる命を優先したいから。 ・ 大勢の患者を助けることはよいことだから。	・ 酸素を切れれば，一緒に働く医者や看護師からの信頼をなくしてしまうから。
	第4段階 法と社会秩序の維持への志向（義務を果たすこと） 社会的秩序を維持することが価値基準となり，権威に対して尊敬を示したり，義務を果たしたりすることが正しい行為である。と考える。 （役割意識と使命感の自覚）	・ 多くの人の命を助けることが，医者としての義務である。 ・ 国境なき医師団は，その子だけでなく他の多くの人を助けるのが大切なことだから。（4-A）	・ 自分を頼ってきた人に対して最後まで治療に専念することが，医者としての義務である。 ・ その子どもを，一人の人間として尊重すれば，酸素を切ることはできない。（4-A）
	（社会への矛盾や不合理の発見，人道的な判断の芽生え） ・ 治療を受ける権利はその子どもだけでなく，他の人間も持っているから。 ・ その子どもに酸素を使うことによって，他の人の人間として生きる権利を奪ってしまうかもしれないから。（4-B）	（社会への矛盾や不合理の発見，人道的な判断の芽生え） ・ 酸素を切ることは，その子どもの人間としての生きる権利を奪ってしまうことになるから。（4-B）	

第1次判断の結果

	切るべきだった	切るべきでなかった
1	1名	16名
2A	5名	1名
2B	3名	9名
3	2名	0名
4A	0名	0名
4B	0名	0名

最終判断の結果

	切るべきだった	切るべきでなかった
1	0名	1名
2A	9名	1名
2B	5名	8名
3	9名	0名
4A	0名	0名
4B	0名	0名

（その他・不明4名）

第1次判断，最終判断から，この学年の子どもたちの道徳的判断規準が大体第2段階にあることが示唆された。第3段階の道徳的判断規準である「他者への同調」「よい子志向」へと方向づけるために，第3段階での葛藤を含む教材を用いることが有効であることが示唆された。

(4) 「楽しさ感」と「有用感」の内容

ワークシートに書かれた子どもの感想から「楽しさ感」「有用感」について記述しているものを抽出し，それぞれについて道徳性の発達段階との関連で分析を行った。ここでは，「有用感」を示すキーワードとして「・・・がわかりました」など新しい知見に気づい

たという言葉を取りあげた。「楽しさ感」を示すキーワードとして，「こういう授業をもっとしてみたい」「ずっと考え続けたい」という言葉を取りあげた。その結果，以下のことが考察された。

- ①「楽しさ感」を示す記述は5名に見られた。それらは，「判断に迷った」（2名），「判断が難しかった」「これからもずっと考え続ける」「こんな授業をした」（各2名）であった。
- ②「有用感」を示す記述は13名に見られた。それらは，「命の大切さに気づいた」（7名），「世界の状況は日本とは異なることに気づいた」（3名），「戦争のもたらす現実に気づいた」（2名），「医師の仕事の大変さに気づいた」（1名）であった。
- ③以上から，「楽しさ感」の内容としては簡単に解決しえない問題が含まれていることがあげられた。「有用感」としては，これまで知らなかった新しい知見が含まれていること，自分の生活と照らし合わせるができること，などがあげられた。

(5) 考察

以上の事前研究授業から「楽しさ感」「有用感」の内容が示されるとともに，以下の点が課題として示された。

- ①今回のように子どもの日常的な体験から離れた教材を用いる際には、教材の理解を深めるために事前に「国境なき医師団」「難民キャンプ」などについて理解をさせておくことが必要である。そうした事前準備がないと、知識がある子どもとない子どもとの間での理解に差ができ、話し合いが有効に機能しない可能性がある。
- ②討議が形式的なものにならないようにするためには、言葉の背景にある事実の重みや人々の思いに気づかせる必要がある。とくに第2段階から第3段階へと方向づけるために、社会的な心情な判断の芽生えを大切に、他者の気持ちや立場に気づかせることが必要であると考えられる。

こうした課題から、次回の研究授業では、以下の点に焦点づけて授業を行うことにした。

- ①子どもたちの日常的な体験から離れた教材は、「有用感」を高めるには効果的であるが、「楽しさ感」から考えると、もう少し子どもたちの日常感覚に近いものがふさわしいのではないかと思われた。そこで、教材の中に含まれる価値葛藤を自分のこととして捉え、考え、判断することに重点を置くために、共有知識をもつ教材を選択することにした。
- ②討議が形式的にならないようにするために、映像資料等を用いて子どもの既存の知識をゆさぶり、話し合いが必然的なものになるよう工夫することにした。多様な意見を受け入れ、吟味しながら自分の意見を深めることを通して、他者の思いや考えに気づき、社会的な心情や判断を深めることができるようにすることにした。

2. 研究授業—国語科と社会科と道徳授業とを融合した道徳授業の試み—

附属三原小学校の5年生は社会科で自動車工業の発展について学び、国語科でレイチェル・カーソンについて学ぶ。これらの知識内容はそれぞれ教科のねらいにもとづいて教えられる。しかし深いところでは、これらの知識内容は矛盾を含んでいる。すなわち、自動車工業の発展は、私たちのよりよい暮らしのために公害等の問題が生じていることを指摘はするが、それは自動車工業の発展によって解決されるであろう見通しを教える。レイチェル・カーソンは、人間の発想の転換を求めており、環境の保全があってこそその人類の発展を説く。これらは知識内容の受容のレベルでは、とくに矛盾は起きないが、自分がこの時代、この世界に生きるという主体的な観点から見れば、人間のもつ矛盾そのものを示していると言える。小学校5年生にお

いて、教科で学んだ基礎知識をもとに、人間の矛盾について考えることができる格好の教材であると考え、道徳授業としての教材化をはかることにした。

国語科での押さえとしては、レイチェル・カーソンの考え方や生き方を「地球上の全ての生き物がかかわり合いながら生きている環境を守ろうと、自らを燃やし尽くし、訴えた」(国語教科書指導書より)という観点から取り上げた。授業を終えてのレイチェル・カーソンについての子どもたちの代表的な捉えは、「地球環境や自然を守るためにがんばってくれて有り難う」(子どもの作文より)というものだった。

社会科での押さえとしては、「自動車があることによってもたらされる便利さと共に、環境汚染や交通事故などについて考えることを通して、自動車をつくる人々が環境や人に優しい自動車をつくるために工夫や努力をしていることを理解する」(指導者作成の単元目標より)ことがあげられた。自動車と人・環境とのかわりについて学習中の子どもの様子としては、「自動車がわたしたちの生活に便利さを与えてくれることだけでなく、人や環境に与えている負の部分も捉える事が出来た」、「排気ガスをどうにかしなければならぬと多くの子どもたちが考えるようになってきた」、「自動車のよい面を残しつつ、人と環境に優しい車を作っていくことの重要性を理解することができた」、「今後も自動車をより改良し、人と自然にやさしいものにしていかなければならないと考えている」(指導者の捉えより)といった理解があげられた。

これらを受けて、道徳授業では、「人間が自己の利便性を追求すればするほど、自然環境には負荷がかかる。そのことを知った上で人はいかに生きるべきか」をねらいとすることにした。なお、附属三原小学校においては5学年は教科担任制のため、国語科、社会科、道徳授業はそれぞれ異なった教師が担当している。したがって本研究授業の成果は、小学校のみならず中学校における道徳授業にも応用できると考える¹¹⁾。

(1) 授業の概要

日時：2004(平成16)年12月16日(木)

第5校時(80分授業)

対象学年：附属三原小学校第5学年第9学級39名

授業者：宮里智恵

主題：自動車の排気ガスによってもたらされる酸性雨の影響を考えることにより、自分たちの生活の仕方が地球環境に負荷を与えていることに気づき、少しでも生活の仕方を変えることによって自然環境を大切にしようとする気持ちを持つ。

題材：自動車のある生活（自作資料）

研究の視点

- わたしたちの日常生活は今や、自動車の存在なくしては語れない。重い荷物を容易に運んだり、遠い場所へも短い時間で移動したりすることの出来る生活は自動車の存在あってのことである。しかし一方で、自動車から排気されるガスは大気を汚し、酸性雨となってわたしたちの頭上に降り注いでおり、地球環境を守るためには自動車の使い方を改めなければならないことも明らかになってきている。言うまでもなく地球は人間以外の生命体にとってもたった一つの住みかであるが、自動車の開発のみならず人間が自分たちの利便性を追求し続けた結果この地球環境を破壊し、自分自身の生命をも脅かす結果を招いている。本題材においては、このことへの気づきを子どもたちに持たせ、地球環境を守るために一人ひとりが少しの努力からでも始めようとする気持ちを醸成することをねらいとする。
- 子どもたちは生まれたときから自動車のある生活を常としており、自動車を利用することが地球環境に負荷を与えていることについては実感を持っていない。7月に国語の学習で、農薬散布に警鐘を鳴らし地球環境を守ることを世界に訴えたレイチェル・カーソンを学び、9・10月には社会科の学習で自動車産業の発展について学んでいるが、レイチェルの言わんとする人間の利己性や地球環境破壊への恐怖などは、自動車利用においても同じ視点から考えられることについてはほとんど気づいていない。地球規模で自然環境を守ることの大切さについて知っているものの、そのことを自分の生活と結びつけて考えたり地球環境を守るために自分にも出来ることがあることを具体的に考えたりした経験はあまりない実態にあると言える。
- 感じたことや考えたことを安心して出し合い、考えを交流させ合いながらお互いに高まっていこうとする集団づくりをめざしている。本学級は温かく支え合うことの出来る雰囲気を持っており、自分の考えを出し合うことに抵抗感は少ない様子であるが、さらに深く考えを出し合い練り合う中で十分に議論が出来る学級に育てたいと考えている。そこで、個人の考えを小集団の中で出し合わせ、それを全体集団の場に出させてさらに話し合うなど学習形態を工夫したり、考えを各自が文章にし、それを集団の場で交流したりするなどの工夫をするようにする。
- 指導に当たっては、まず自動車がある生活のよい点とよくない点について各自の考えを持たせる。その上で自動車の排気ガスによる大気汚染に焦点化し、

特に酸性雨に関する資料を与えながら、自動車存在の必要性について考えさせる。自動車の排気ガス→大気汚染→酸性雨→生物・森・人工物・人体などへの影響という関係の理解がしやすいよう、絵図や写真・地図などを示すとともに、酸性雨は身近なところでも降っていることを押さえ、自分の生活に関係のあることとして捉える事が出来るようにする。必要に応じて揺さぶり発問などを入れながら、地球環境を守るためには自分たちが享受している便利な生活を少し後退させる必要があることや小さな努力を多くの人が積み重ねることによって環境への負荷は軽減されることに気づかせる。このとき、社会科で学んだことを生かしながら発言できるように、社会科で使った資料も準備しておく。展開後段では「水」をキーワードに雨→川→海の循環を歌った「川は誰のもの」の歌を歌詞を中心に聴かせ、美しい地球環境を守りたいという気持ちを高める。終末ではこの学習をして自動車のある生活について考えたこと、考えが変容したことを、国語で学んだレイチェル・カーソンさんへの手紙という形で表現させ、地球の自然を大切にするために、小さなことからでも始めようとする意欲を持たせる。

計画：1時間扱い

本時の目標：自動車のある生活のよい点とよくない点について話し合ったり、酸性雨の恐ろしさについて考えたりすることを通して、多くの生命体が暮らす地球環境を守りたいという心情を高め、そのために出来ることを少しからでもやっという意欲を持つ。

準備物：自動車産業の発展を示す資料、酸性雨に関する資料（絵図・写真・地図など）、「川は誰のもの」の音楽ビデオ、レイチェル・カーソンの写真、レイチェルへの手紙の紙

(2) 授業過程

学 習 活 動	教師の働きかけとねらい (集 団)	
<p>○ 授業者が今度買った自動車を見て、感想を出し合う。 ・かっこいい ・色が派手だなあ など</p>	<p>○ 感想を自由に出させ、リラックスした雰囲気を作ると共に自動車にかかわる話し合いへの構えを持たせる。</p>	<p>(全) 学習の構えをつくらせる。</p>
<p>○ 自動車のある生活のよい点とよくない点を出し合う。 良い点 ・移動が楽である。 ・速く ・時間を問わずに ・重くて大きい荷物などがあっても ・雨に濡れずに など 良くない点 ・騒音がある ・空気がよごれる ・振動がある ・交通事故が多い など</p> <p>○ 酸性雨による地球環境の被害について知り、自動車のある生活について考える。 ・自動車があることが当たり前今の生活はこのままでいいのだろうか。 ・どうすれば環境への影響を少なくできるのだろうか。 ・自動車に乗るのを減らせばいい。でもそうすることで今よりも不便になること、我慢しなければならないことがありそうだ。 ・社会科で学習したようにハイブリッドカーやソーラーカー、電気自動車などに乗るようにすればいい。 ・でも、少しぐらいの努力ではあまり効果がないのではないか・・・ など</p> <p>○ 「川は誰のもの」の歌を聴き、美しい地球への思いを交流する。</p>	<p>○ 自動車のある生活についてよい点とよくない点から考えさせ、便利さと引き替えに環境破壊が進行していることに気づかせる。 ・日本に於ける自動車の保有台数について最新の数値を示し、いかに多くの自動車が普及しているのかを社会科の学習とも絡めて押さえる。 ・よい点、よくない点について、できるだけ実生活での体験を交流させ、身近な問題として考えることが出来るようにする。 ・自動車の良さと良くない点は、人間が利便性を追求した結果もたらされた点であることを押さえる。</p> <p>○ 自動車による大気汚染に焦点化し、中でも酸性雨について知識を与えることで、自動車存在の必要性について考えさせる。 ・自動車の排気ガス→大気汚染→酸性雨→生物・森・人工物・人体などへの影響という関係が理解できるよう、絵図や写真・地図などを示す。 特に酸性雨は身近なところでも降っていることを押さえ、自分の生活に関係のあることとして捉える事が出来るようにする。 ・新しく開発されている自動車や排気ガス規制の国際基準などについては社会科で使った資料を必要に応じて提示する。</p> <p>○ 「川は誰のもの」の歌を歌詞を中心に聴かせ、美しい地球環境を守りたいという気持ちを高める。 ・地球を住まいとしているのは人間だけではないことを押さえる。</p>	<p>(個) 各自の考えを持たせる。 (個)→(全) お互いの考えを交流させる。</p> <p>(全) しっかりと聞かせる。 (小) 各自の考えを出しながら話し合わせる。 (小)→(全) 班で話し合ったことを出し合わせる。 (全) いろいろな考え方を交流させる。 (全) しっかりと聴かせる。</p>
<p>○ 自動車のある生活について考えたことを、国語で学んだレイチェル・カーソンさんへの手紙という形で表現する。 ・学習を通して考えが変容したことを中心に書く。</p>	<p>○ 自動車のある生活について考えたことをしっかりと書かせ、地球環境を守るために出来ることをやっというとする気持ちを高める。 ・時間があれば交流させる。</p>	<p>(個) 落ち着いた雰囲気を書かせる。</p>

(3) 「楽しさ感」と「有用感」

授業後のアンケートで、授業の「楽しさ感」と「有用感」について記述してもらい、分析を行った。アンケートでは、学習の方法について、「とてもよかった」「まあまあよかった」「あまりよくなかった」「よくなかった」のうちひとつに○をつけ、その理由について記述した。その結果、「とてもよかった」31名(約80パーセント)、「まあまあよかった」7名(約18パーセント)、無効(複数回答)1名であり、ほとんどの子どもが「とてもよかった」「まあまあよかった」と回答した。その理由を「楽しさ感」と「有用感」から分析した結果は以下のとおりである。(複数回答3名、その他・不明10名)

「楽しさ感」について記述したのは9名で、その内訳は「わかりやすかった」(4名)、「映像資料がよかった」(3名)、「たくさん発表できた」(1名)、「忘れていたことが勉強できた」(1名)、「普通の道徳

とちがう授業だった」(1名)だった。

「有用感」について記述したのは22名で、内訳は「新しい知識が増えた」(13名)、「自分のこれからの生き方の参考になった」(5名)、「社会科と国語科で学んだことの復習になった」(4名)であった。

「楽しさ感」を記述した9名のうち、5名が第3段階の判断を示した。「有用感」を記述した22名のうち、9名が第3段階の判断を示した。

(4) 子どもの道徳的判断規準の変容 —レイチェル・カーソンへの手紙の比較検討—

子どもたちは7月に国語科の授業において、学習のまとめとしてレイチェル・カーソンへの手紙を書いていた。本授業でも同じようにレイチェル・カーソンへの手紙を書くことをまとめとして行い、内容の比較検討を行った。分析視点は、事前研究授業の結果を受けて、「自己本位志向」「社会的心情・判断の芽生え」

「他者への同調（「よいこ」志向）」とした。昨年度ロールバグの道徳性の発達段階論を参考にして作成した道徳性発達指標を用いて分析を行った。その際、国語の授業はとくに道徳性の発達を意図して行われたものではないので、分析視角を変えて行った。

①国語の授業でのレイチェルへの手紙内容を分析するための道徳性発達指標

		レイチェルさんへの思い	
前慣習的水準	第1段階 罰回避と従順志向（罰の回避と権威に服従すること） 行為の意味や価値とは無関係に、罰を避けたり、権威に対して盲目的に服従したりすることを正しい行為であると考ええる。 （他律的判断中心）	・レイチェルさんはすごい。	
	第2段階 道具的互惠主義志向（利己的、自分本位に判断すること） 行為における損得が判断基準となり、自分や他者の欲求を満たすことが正しい行為であると考ええる。人間関係は取引の場のようにみられる。 （自意識と社会性の芽生え）	・レイチェルさんのおかげでアメリカは助かった。(2-A)	
		(社会的な心情や判断の芽生え) ・レイチェルさんは自然や環境のためにがんばってくれた。(2-B)	
慣習的水準	第3段階 他者への同調、あるいは「よい子」志向（よい子として振る舞うこと） 他人からの肯定的な評価が価値基準となり、他人を喜ばせたり、助けたりすることが正しい行為であると考ええる。多数意見への同調がみられる。 （他者意識と周囲への配慮）	・自然や環境を守ることは大切なことだ。 ・自然や環境を守るために何かをすることは必要なことだ。	
	第4段階 法と社会秩序の維持への志向（義務を果たすこと） 社会的秩序を維持することが価値基準となり、権威に対して尊敬を示したり、義務を果たしたりすることが正しい行為であると考ええる。 （役割意識と使命感の自覚）	・環境を守るために法律を作り守ることは必要なことだ。(4-A)	
		(社会への矛盾や不合理の発見、人道的な判断の芽生え) ・便利さの追求が環境を破壊する中で、環境を守ることを優先することは大切なことだ。(4-B)	

②道徳授業でのレイチェルへの手紙内容を分析するための道徳性発達指標

		自動車なくすべきだ	自動車なくすべきではない
前慣習的水準	第1段階 罰回避と従順志向（罰の回避と権威に服従すること） 行為の意味や価値とは無関係に、罰を避けたり、権威に対して盲目的に服従したりすることを正しい行為であると考ええる。 （他律的判断中心）	・自動車があると乗ってしまうから。	・自動車がないと不便だから。
	第2段階 道具的互惠主義志向（利己的、自分本位に判断すること） 行為における損得が判断基準となり、自分や他者の欲求を満たすことが正しい行為であると考ええる。人間関係は取引の場のようにみられる。 （自意識と社会性の芽生え）	・自動車は排気ガスを出す、事故を起こすなど人間にとってよくないから。(2-A)	・自動車があると楽で便利だから。(2-A)
		(社会的な心情や判断の芽生え) ・自然や環境にとってよくないから。(2-B)	(社会的な心情や判断の芽生え) ・病気の人やお年寄りが助かるから。(2-B)
慣習的水準	第3段階 他者への同調、あるいは「よい子」志向（よい子として振る舞うこと） 他人からの肯定的な評価が価値基準となり、他人を喜ばせたり、助けたりすることが正しい行為であると考ええる。多数意見への同調がみられる。 （他者意識と周囲への配慮）	・便利さよりも環境を大切にすべきだから。	・便利さを大切にしながら環境問題を考えればいから。
	第4段階 法と社会秩序の維持への志向（義務を果たすこと） 社会的秩序を維持することが価値基準となり、権威に対して尊敬を示したり、義務を果たしたりすることが正しい行為であると考ええる。 （役割意識と使命感の自覚）	・環境を守るための法律を作ってその範囲内で便利さを追求すべきであって、自動車製造を優先すべきではないか	・自動車をなくすことはこれまで得てきた便利さを失うことで、それはできないから規制するなどして便利さも保

ら。(4-A)	護すべきだから。(4-A)
(社会への矛盾や不合理の発見, 人道的な判断の芽生え) ・環境があって人類が存続しようという観点から物事を判断すべきである。(4-B)	(社会への矛盾や不合理の発見, 人道的な判断の芽生え) ・自動車をもつ権利を認めた上で環境問題を判断すべきだから。(4-B)

③国語の授業での手紙の内容分析

	人数
1	7名
2A	6名
2B	10名
3	0名
4A	0名
4B	0名

(その他・不明10名)

④道徳授業での手紙の内容分析

	人数
1	0名
2A	6名
2B	8名
3	17名
4A	0名
4B	0名

(その他・不明8名)

国語科でのレイチェルへの手紙と道徳授業でのレイチェルへの手紙の内容を、道徳性発達指標にもとづいて分析した結果、以下のことが示唆された。両方の手紙を提出した18名のうち、道徳的判断規準が高まったものは13名で、第1段階から第2段階になったもの3名、第1段階から第3段階になったもの3名、第2段階から第3段階になったもの7名だった。「楽しさ感」を記述したものの5名のうち、道徳的判断規準が高まったものは4名、「有用感」を記述したものの10名のうち、道徳的判断規準が高まったものは8名だった。これらから、「楽しさ感」、「有用感」とともに道徳的判断規準を高めるのに有効に作用していることが示唆された。本授業では、「楽しさ感」を支えたのは既習事項を教材としたことによる授業のわかりやすさ、映像資料のよさ、であった。「有用感」を支えたのは、新しい知識の提供、生き方への示唆であった。

(5) 考察

- ①共有知識にもとづく教材の選択という観点から、今回は社会科と国語科から題材をとって授業者が自作教材を作成した。このことによる成果は、「楽しさ感」を支えるわかりやすさをもたらした点である。討議の際にも、すでに社会科で習っている知識が下敷きとなっているので、意見を発表しやすい雰囲気があり、身近な自動車に関する事実であることもあって、自分のこととして考える状況が作り出されていた。
- ②映像資料による子どもたちの既有知識のゆさぶりは、「楽しさ感」を支える映像資料の評価と、「有用感」を支える新しい知識の獲得をもたらしたといえる。今回用いた映像資料は、自動車の排気ガスによってもたらされる酸性雨の被害に関するものであ

たが、酸性雨による被害を具体的な映像で確認したのは初めてだったので、子どもたちは衝撃を受けていたようだった。また広島近辺にも酸性雨が降り注いでいる事実をデータから読み取ることによって、自分のこととして考えることができたように思われる。

- ③意見が出しやすい雰囲気であったことと、映像資料によるゆさぶりとによって、子どもたちは自動車をもつ利便性とそのことがもたらす被害とについて自分のこととして考え、自然や環境、自分を含めて人類にとってよりよい生き方はどのようなものか、率直な意見交換ができた。自動車をなくすことはできないという現実的な立場にたった意見交換の中で、「有用感」を支える「自分のこれからの生き方の参考になった」という思いを子どもたちがもつにいたったのではないかと思われる。
- ④国語科で7月におこなった授業でのレイチェルへの手紙と、本授業でのレイチェルへの手紙を道徳性発達指標という観点から比較してみると、道徳授業後において道徳的判断規準の向上が見られる。国語科の授業においては道徳性の発達ということを主眼点としてはいないので、単純な比較はできないが、教科学習と道徳授業を組み合わせることが道徳的判断規準の向上に有効であることが示唆されたのではないかと考える。

3. 本研究の成果と課題

(1) 成果

- ①道徳授業での「楽しさ感」は内容のわかりやすさからきていることが示唆された。このことは子どもの発達段階をふまえた教材の選定の必要性を示唆している。内容がわかりやすいこととともに、「有用感」で示されているように、新しい知見がもたらされ、それによって自分の生き方を考えることができるような内容を求めていることも示唆された。これらは、高学年の子どもや中学生の道徳授業の教材選定の際の視点として有効であるといえよう。
- ②今回は社会科と国語科ですでに習っている内容を下敷きにして道徳授業を展開したので、子どもたちは発言しやすくたくさんの意見が交流された。とくに自動車の便利さと不便さについては、社会科での知識と自分の日常の行動とがうまく重なり合っており、活発な意見交換が行われた。そうした意見交流

に対し、酸性雨がもたらす被害という新しい知見が示されたことで、既知の知識がゆさぶられ、思考活動が活発化した。こうした新しい知見にもとづく活発な意見交流が、道徳的判断規準を向上させる一因になったと考えられる。

- ③高学年の子どもたちに、教科学習で習った知識に加えて新しい知見をゆさぶりとして用いるためには、日頃からニュースや TV 番組等から題材を集めておく必要がある。とくに映像資料は強いインパクトを与えるので、ビデオやプロジェクターを効果的に用いることが有効である。

(2) 課題

- ①今回は国語科での学習が7月、社会科での学習が10月には終了しており、知識を呼び戻すのに時間がかかった。いずれかの学習が進行している途中にこうした道徳授業をはさみこむことで、よりいっそうの学習効果があったのではないかと思われる。その意味で、年間計画において教科との関連を組み込むことで、総合単元的道徳授業としての効果が高まるのではないかと考える。
- ②こうした共通の知識内容にもとづく授業は高学年以降の子どもにとっては有効であると思われるが、低学年の子どもにとっては共有の体験にもとづく授業の方が有効だと考えられる。低学年、中学年、高学年で道徳授業の展開の仕方を変えることで、子どもたちに道徳学習の価値を考えさせることができるのではないかと思われる。子どもの発達段階に応じた道徳授業の開発は今後の課題である。

【注】

- 1) 文科省「道徳教育推進状況調査」(1998年6月)、参照。この調査によれば、「道徳の時間を『楽しいあるいはためになると感じている児童生徒の学校ごとの割合』は、小学校低学年ではほぼ全員が感じていると回答した学校は45パーセントであるが、高学年になると14.2パーセント、中学3年生で4.9パーセントと激減している。
- 2) 荒木紀幸編著『道徳教育はこうすればおもしろい—コールバーグ理論とその実践—』(北大路書房、1988年)、荒木紀幸編著『続 道徳教育はこうすればおもしろい—コールバーグ理論の発展とモラルジレンマ授業』(北大路書房、1997年)等参照。
- 3) 鈴木由美子・松田芳明・中尾香子・今永泰生「道徳的価値葛藤を含む教材を用いた道徳授業の開発」(『学校教育実践学研究』第10巻 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター

2004年)参照。

- 4) 鈴木由美子・宮里智恵他「体験活動を有効に活用する総合単元的道徳授業の開発研究—授業分析による学習効果の検討から—」(『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第32号 2004年)参照。この論文の中では「特定の道徳的価値に関する学習を道徳の時間だけでなく、関連する教育活動や日常生活をもかかわりをもたせて、それらを一括りとして総合単元的に計画し、長期的展望のもとに継続的に道徳学習ができるようにする」「総合単元的道徳学習」(押谷由夫編著『新学習指導要領を生かした道徳の授業 NO. 1 総合単元的道徳学習を取り入れた授業』小学館、2002年、6ページ)と区別して、「総合単元的道徳授業」という言葉を用いている。これは、教科、教科外ならびに総合的な学習の時間において子どもが学習したことを生かす1時間の道徳授業のことを意味している。
- 5) 瀬川栄志『授業分析の技法』(明治図書、1984年)を参考にして道徳授業用の分析手法を開発し、それを用いて授業分析を行っている。
- 6) 鈴木由美子・松田芳明他、前掲論文、参照。道徳性発達指標の作成にあたっては、コールバーグが示した観点を授業実践においてわかりやすくするため、とくに以下の点に着目して修正を加えている。まず第1に、3水準の違いをより明確にするために、「判断基準」「価値規準」という用語を使って価値の質に着目できるようにした。「判断基準」(前慣習的水準)は多様な価値を自覚する段階であるとし、「価値規準」(慣習的水準)は所属社会の価値に照らし合わせて判断する段階であるとしている。第2に、コールバーグ理論に基づく分析表を教育実践レベルで考察すると、第2段階から第3段階への飛躍の壁と第4段階から第5段階への飛躍の壁が感じられたので、第2段階と第4段階にそれぞれAとBのレベルを位置づけた。第3段階への飛躍の壁として、集団的かかわりや社会認識を育むことから生じる社会的な心情や判断の芽生えを2-Bとして位置づけた。第5段階は、より普遍的な考え方をもとにして合意形成された事項を価値規準にする段階である。所属社会への矛盾や不合理を発見したり、アイデンティティを広め深めたりして人道的な視点で判断しようとする姿勢が大切である。そこで、第5段階への飛躍の壁として社会への矛盾や不合理の発見、人道的な判断の芽生えを4-Bとして位置づけた。
- 7) NHK『課外授業ようこそ先輩』(国境なき医師

団：貫戸朋子，1999年）を参考に今永泰生が作成した。

8) 「中2教科書『マドゥーの地』貫戸朋子」(光村書籍，2002年) から今永泰生が作成した。

9) 国語科は加藤秀雄教諭，社会科は石原直久教諭，道徳は5年9学級担任の岡芳香教諭が担当している。本研究にあたって3人の先生方に多大なご協力をいただいたことに深く感謝申し上げる。